



SOTO ZEN JOURNAL

DHARMA EYE

News of Soto Zen Buddhism: Teachings and Practice

『法眼』 発刊50号記念にあたり p1
秋葉玄吾

北アメリカ開教100周年記念「授戒会」について p3
奥村正博

青山俊董大本山總持寺西堂老師・ゴッドウィン建仁曹洞宗国際センター所長対談記録 p5

坐禅への脚注集 (23) p16
藤田一照

法
眼

Number

50

September 2022



「法眼」発刊50号記念にあたり

国際布教総監 秋葉玄吾
北アメリカ国際布教総監部

曹洞宗国際センターニュースレター『法眼』の50号発行の節目を迎えましたことお祝い申し上げます。また、これまでの発行の業務に携わった歴代及び現在の国際センターの役職員の皆さまのご尽力と、ご寄稿いただいた方がた、そして読者の皆さまへ厚くお礼申し上げます。

「『法眼』は次で50号となり、記念号としたので記事の執筆をお願いします」と依頼を受けたとき、いささか国際センターについて回顧的な想念が湧き、感慨深いものがありました。曹洞宗国際センターは当初、カリフォルニア州ロサンゼルスにある両大本山北米別院禅宗寺内「北アメリカ開教総監部」の一機関として1997年4月、禅宗寺創立並びに北アメリカ開教75周年記念行事を期し「北アメリカ開教センター」の名称で禅宗寺内に創設されました。所長に奥村正博師が就任、また、禅宗寺開教師であった古溪理哉師がセンター書記に就任されました。その折に御高齢であられた山下総監の補佐として私は総監部賛事の任命を受け、同年5月には開教総監の任命を受けました。その後、6月に横山泰賢師（翌1998年開教センター書記に任命）、南原一貴師（桑港寺開教師兼任、のちに開教センター書記に任命）が総監部書記に任命され、新体制のもと、開教センター一丸となった本格的な活動展開への体制が整いました。

開教センター設立の構想は北アメリカを活動

の場としていた前角博雄老師、片桐大忍老師在命の頃から語られておりました。当時、北アメリカ開教総監部は総監部会議を年に一回開催しており、出席者は開教師として任命され赴任していた日本人開教師が主でありました。その会議の席で前角老師、片桐老師は「自分たちは仏祖正伝の道元禅師・瑩山禅師の只管打坐、即心是仏を承当することを宗旨とする曹洞禅をアメリカ人に説き、共に坐禅、日課行持、応量器飯台など基本的なことを実践し伝えることで精いっぱいである。宗務庁が日本同様に「教化センター」のような組織をこちらにも設け、専任のスタッフを置いて組織的に布教展開をするのが希しい」という主旨の発言をされていました。

1990年に片桐老師、1995年に前角老師が遷化され、北アメリカ開教75周年記念行事の準備段階において前述の構想を総監部として宗務庁国際課へ提言、宗務庁での協議を経て「北アメリカ開教センター」設置が実現したのでした。

『法眼』の第1号は1997年10月に発行され、題字の『法眼』は私の書によるものです。

開教センターを含む当時の総監部は、北アメリカに広がる曹洞禅に対しどのような活動を展開していくのか、議論が重ねられました。主に鈴木俊隆老師、前角博雄老師、片桐大忍老師から法を嗣いだ現地僧侶が、全米の各地で禅センターを開設して布教活動を盛んに行っている中で、彼らを日本の曹洞宗宗制の中でどのような身分で処遇していくのか等、種々の難題を抱えておりました。また、各禅センターでは法類との交流はありましたが、異なる法系との交流は希薄でした。

まず初めに、道元禅師・瑩山禅師の法系に連なる曹洞禅という意識の形成を第一課題としました。奥村所長の発案により、年2回の『法眼』

の発行と開教センター主催による各禅センターを会場とした年3回の摂心を実施し、講師には禅センターの指導者を招き、異なる法系下による禅センター間の相互交流と理解を深めていきました。

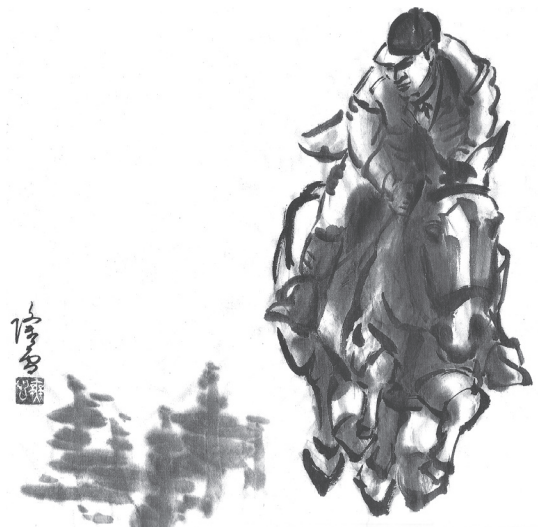
当時を振り返ると、開教センター主催の摂心、自坊である好人庵禅堂と禅宗寺のそれぞれ年2回の摂心、さらには壇務も抱えながらよく勤まったものだと、今さらながらに驚いております。その後は山下前総監の本葬、1999年には道元禅師ご生誕800年慶賛事業としてカリフォルニア州スタンフォード大学を会場とした「道元禅師シンポジウム」が開催され『典座教訓の参究』の英訳プロジェクトが進められました。また、同時期には開教センター事務所がロサンゼルスからサンフランシスコ桑港寺へ移転いたしました。思い起こすと、総監部と開教センターのスタッフ一同は使命感を持ちながら獅子奮迅の活動ぶりであったと今でも胸が熱くなります。人生の中で、あのような時期に参画できたことはかけがえのない経験となりました。そして、2000年に禅宗寺にて開催された会議には、全米の禅センターから40名の出席があり、日本人僧侶とアメリカ人僧侶が初めて一同に会す新体制活動の成果が得られた会議となりました。

2002年に開教センターは「国際センター」へと改編され、開教総監部は国際布教総監部、開教師は国際布教師と変更されました。総監部は日本曹洞宗の宗制をアメリカの曹洞禅にどのように適用していくのか、という行政的な役割を担い、国際センターは700年以上培ってきた曹洞宗の一仏両祖のみ教えに基づく只管打坐、即心是仏を承当する宗旨、そして、禅戒一如、修証不二の妙諦を実践する教義の現地に於ける敷衍と役割分担が明確になりました。その後も

国際センターは時勢に応じ、日本国外を対象とした布教活動を盛んに展開しております。心身堅固に働かれることを祈り『法眼』の今後の続刊と一層のご活躍を心より願っております。

最後になりますが、本年2022年は北アメリカ国際布教100周年の年を迎えました。北アメリカでの曹洞宗の布教活動が始まった1922年、磯部峰仙老師がロサンゼルスリトルトーキョーにあった長崎氏の自宅2階に「禅宗寺仮教会」を開設、その12年後の1934年にはサンフランシスコジャパントウンに桑港寺が開かれました。

現在、北アメリカ国際布教総監部には僧籍を有する僧侶が300名を超え、曹洞禅の法系下を含めると1,000名以上の出家者が存在しています。100年の曹洞宗の歴史を祝う行事が本年から来年にかけて、アメリカの地で行われます。次の100年を見据えた活動が既に始まっております。どうぞ皆さまも是非ご参加くださいますようお願い申し上げます。





北アメリカ開教100周年記念 「授戒会」について

奥村正博
三心寺

北アメリカにおける曹洞宗の活動100周年を機に、日本の伝統に則った「授戒会」を開催することになりました。この度、曹洞宗の「戒律」についてお話させていただくことになり、大変光栄に思っております。「戒律」を学ぶとき、私たちの主なるテキストは『仏祖正伝菩薩戒教授戒文』（ぶっそしょうでんぼさつかいきょうじゅかいもん）です。（以下、「教授戒文」）

戒律(Sila): 人生に対する基本的な姿勢の指針

仏教は民間の宗教ではないので、生まれながらにして仏教徒というわけではありません。仏教徒になるには、菩提心を起こし、誓いを立て、人生の指針として菩薩戒を授かるのであります。道元禅師は『正法眼蔵』授戒巻の中で「インドや中国では、仏や祖師から仏法が伝えられているが、仏法に入るためには戒律を受けなければならない。戒を受けなければ、仏の弟子にも、祖先の子孫にもなれません。悪行・不善を避けることは、禅を学び、法を探究することそのものであります。仏法の真の宝は、戒律が第一に重要である」と述べています。

三帰依（さんきえ）

曹洞宗では、僧侶も一般人も十六菩薩戒を授かります。これは三帰依、三聚浄戒、十重禁戒から成ります。三つの戒の第一は、仏・法・僧宝に帰依することです。道元禅師は『教授戒文』の中で「私たちが『仏・法・僧に帰依する』と唱えれば、仏の大いなる戒を得ることができる」

と仰っています。三宝に帰依すると、仏のすべての戒律を得ることができると仰られているのです。私たちは、三帰依は他の十三の戒を受ける前提だと思うかもしれませんが、三宝に帰依すること自体が他の十三の戒を受けることと同様であるのです。十三の戒は三宝に帰依することに含まれています。言い換えれば、十三の戒は三帰依の意味を説明するものであります。要するに、三帰依と戒を受けることは同じことであるのです。

三帰依の徳

道元禅師は『正法眼蔵』歸依佛法僧巻で、こう仰っています。

この歸依佛法僧の功德、必ず感應道交するとき成就するなり。たとひ天上・人間・地獄・鬼畜なりといへども、感應道交すれば、必ず歸依したてまつるなり。すでに歸依したてまつるがごときは、生生世世、在在處處に増長し、必ず積功累徳し、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり。

「感応と感應が交わり、両者が合一すること」である。天台智顗（てんだいちぎ、538～597）はこの表現を、危機に陥った子供とその子供を助けようとする両親の姿に例えて説明しています。子供が水に落ちたり、何らかの危険にさらされたとき、親はすべてを投げ出して、一心不乱に子供を助け出そうとする。そんな時、子供の「助けて」という泣き声と、親の子供に対する思いが双方から働きかけ、子供の「助けて」という気持ちと、親の子供に対する愛情が融合するのです。私たちが何か精神的な道を探するとき、ほとんどの場合、水に落ちた子供のように、何らかの形で困難に陥っています。何か助けを求

めると、どういうわけか、何かが提供されていることに気づくのです。例えば、私が10代の頃、道に迷い、どう生きていけばいいのかわからなくなったとき、恩師である内山興正老師の本に出会いました。その本を読んで、先生の教えや生き方に吸い込まれるような感覚を覚えました。

道元禅師も『正法眼蔵』発菩提心卷の中で同じようなことを述べています。

しかし、共感（衆生）と応答（仏）の相互作用（観音床）を体験するとき、菩提心を起こさせるのである。それは仏や菩薩から与えられるものではなく、個人の能力で獲得するものでもない。共感と反応の相互作用を体験して菩提心を起こすのであって、勝手に起こるものではない。

道元禅師の教えでは、生き物の共感と仏の慈悲が一体となって働き、菩提心を起こさせると説かれています。この働きを道元禅師は「全機」と呼んでいます。私たちは仏に帰依し、菩薩道を歩んで仏法を学び、修行し、自分の能力の許す限り、他の生き物を助けていく。道元禅師は同書で次のように述べています。

この心を起こした後、さらに無数の仏に会い、供養し、仏を見、法を聞き、さらに菩提心を起こす。それは、雪に霜をつけるようなものである。

三宝に帰依することは、菩薩の修行の第一歩であり、仏に向かう歩みをするのであります。同時に、帰依することは元の場所に戻ることでもあります。『法華経』の中で、貧乏な息子が父親の元に帰る話と同じであります。

帰依は避難所を見つけるようなものです。この場合、三宝は家のようなものです。私は子供の頃、学校に行き、放課後は友達と外でいろいろなことをして遊びました。暗くなり、お腹が空いて疲れてくると、家に帰ります。時には危険に遭遇して、怒ったり、悲しんだり、不安になったりすることもあります。でも、家に帰るとそんな状態から解放されるのです。空っぽのお腹に夕食が用意されている。そして、何も心配することなくゆっくり休んで眠れる。守られている感じがする。そうやって翌日の元気を取り戻したのです。三宝に帰依することは、家に帰ってゆっくり休んでいるようなものなのです。

道元禅師は十重禁戒の第十「三宝を知らずして謗るなかれ」についての解説で、こう述べています。

「釈尊は体現して仏法を説かれた。この三宝は世界の交差点である。三宝の徳は智慧の大海に帰するものであり、計り知れないものである。三宝を敬い、帰依し、奉るべし」

「仏の智慧の大海は、相互依存起源のネットワークにある無数のもののことである」

『正法眼蔵』三昧王三昧

坐禅することは、すべての経典の本質である。仏が仏を見るのはこの時である。まさに坐禅の時に衆生は仏性を得るのである。

道元禅師によれば、私たちの坐禅修行は、三帰依の戒律を守る姿勢であり、究極の家に帰ることなのであります。

青山俊董大本山總持寺西堂老師・ ゴッドウィン建仁曹洞宗国際センター所長対談録

日 時:令和4年4月11日(月)

場 所:愛知専門尼僧堂

対談者:青山俊董大本山總持寺西堂老師、
ゴッドウィン建仁曹洞宗国際センター所長

進 行:松山典嗣師(山梨県 法幢院住職)

通 訳:佐々木悠嶂師

シュプナル法純師

青山俊董老師

私はここの堂長の青山俊董と申します。

ゴッドウィン建仁老師

ゴッドウィン建仁(こんじん)と申します。

先ほどお茶の時間に、鳥のさえずりが聞こえてとても素晴らしかったです。頂いたお茶も、とても美味しかったです。

松山典嗣師

まずは二人の経歴についてご説明させていただきます。ゴッドウィン建仁師は、昭和60年より平成15年までサンフランシスコ禅センターにて修行、日本国内での安居は、平成4年から5年の間、福井県の発心寺にて安居されておりました。平成15年より、アメリカ、ヒューストンにある禅宗系のコミュニティの招聘に応じ、ヒューストン禅センターを立ち上げ、責任者を務められております。平成21年4月より、曹洞宗国際布教師を務めるかたわら、平成30年には曹洞宗国際センターの所長に任命され、日々国際センターの業務にあたっております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

続きまして、青山俊董老師の紹介をさせていただきます。青山俊董師は、幼少期より長野県の無量寺に入門され、15歳で得度、その後、愛知専門尼僧堂にて修行され、宗門学校である駒澤大学に入学、同大学院を卒業されました。その後は愛知専門尼僧堂勤務を経て、堂長に就任され、2009年には、曹洞宗の僧階である大教師に尼僧として初めて就任、2022年1月より、大本山總持寺の西堂に女性として初めて就任されました。また、過去に北米の巡回布教を行っていたこともあり、北米総監部・国際センターが所在する北アメリカ西海岸の曹洞宗国際布教についても精通されております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。



本日のテーマですが「ジェンダー」をテーマに話をさせていただきます。本日のお二方の話を聞きながら、見ている方ひとりひとりが、ジェンダーについて考える、そんな時間を作れたらと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、最初の質問です。現在、曹洞宗宗務庁では、持続可能な開発目標「SDGs」を推進しております。庁内にSDGs推進委員会を設けまして、宗内において、女性が活躍できる環境整

備について話し合いを行っております。このSDGsの理念「誰一人取り残さない」について、お二方のお考えを聞かせいただきたいと思います。

青山俊董老師

最初に話をしておきたいことは、女性がこういうお役を持ったということが大変みなさんの関心を持たれたようですが、ご存じのように、道元さまは「男女を論ずること莫れ。これ仏道極妙の法則なり」とおっしゃり、どこまでも得法、法を得る、得法を敬重すべしとおっしゃった。ですからね、私の頭の中にはあんまり男とか女っていう思いはなくて、どこまでも願いとしてですが「得法」この一点に絞っていきたい。800年も前にこうおっしゃった道元さまはすごいお方ですけど、やっぱりどこまでも男、女というような考えではなくて、得法に焦点を置きたいと思います。

ゴッドウィン建仁老師

そうですね、私も道元禅師のお言葉が素晴らしいと思いますし、その在り方も素晴らしいと思います。また、お釈迦様は女性を対等に受け入れ、出家させました。現在の北アメリカ曹洞禅は女性を対等な存在として認めており、私はその姿勢にいつも感動しています。あらゆる宗教の中で、最初から女性を対等に扱ってきたのは仏教だけだと思います。私はこのことを誇りに思い、アメリカで実践しています。なぜなら、男女の差はないという姿勢を実践することが、私たちの修行に深く関わっているからです。そして、誰をも受け入れるという私たちの在り方は、闘争ではなく、受容の形を明らかに示しています。

青山俊董老師

それから、先ほどの「誰一人として」という言葉から思うことですが「誰一人」ということは、人間対象ですよ。少なくとも仏教は、お釈迦さまの教えは、人類だけではなくて、草木から動物に至るまで地上の一切の存在「悉有仏性」という言葉がありますけど「悉く仏性有り」と。その「有り」を「悉く仏性有り」と読まずに「悉有は仏性なり」。「有」は「ある・なし」ではなくて存在、いわゆる存在そのもの、一切の存在が天地いっばいの仏の御命の現れなのだ。仏教の場合は、人間対象ではなくて地上の一切の存在、言い換えれば宇宙単位、地球単位を対象として考えるのが仏教の姿勢であろうかと思います。

ゴッドウィン建仁老師

はい、本当にそうですね。曹洞宗では庭の扱い方、土地の岩の扱い方、すべてのものを大切にすること、無駄にしないこと、こういったことを理解し、実践していると思います。

これは仏教徒として伝えるべき重要なことの一つです。なぜなら、私たちにとって、世界は私たちの存在の一部だからです。しかし、この考え方は世界的にみると、それほど一般的ではありません。私は、今こそ仏教が世界に進出する重要な時だと思っています。詩的に表現することもできますし、非常に直接的な表現もできます。私たちは皆、木や石が私たちと対等であることを知ることがいかに重要であるかということを修行生活を通して体得しています。そして、私たちはあらゆる全ての物を大切にしなければなりません、何ひとつ置き去りにしてはいけないのです。

青山俊董老師

もうひとつ、そこで思うのですか、考えておきたいのが、例えば一輪のすみれ。アメリカの国立公園の父と呼ばれたジョン・ミューアが「一輪のすみれのために地球が回り、雨が降り、風が吹く」と言っています。「一輪のすみれのために雨が降り、風が吹く」一輪のすみれを咲かせるために天地いっぱいの働きがある。その同じ働きをいただいて、動物も、我々、私がこうしてしゃべることも、全部同じ働きをいただいているということにおいて、仏教の場合は、全部が価値において平等です。しかしそこでひとつ、そういう天地いっぱいの働きをいただいて、私がこうしゃべることができるとか、一輪のすみれが咲くことができるということを、自覚する働きは人間だけがいただいている。その働きをいただいている、花や動物は自覚できないだろうが、人間だけが自覚をする働きをいただいている。

それから、それを説いてくださる教えに出会わないと、自覚が働きをいただいている、気づかないから、自分の命も、他人の命も無駄に使いかねない。そういう意味で、人の命をいただいたことのありがたさ、仏法に会えたありがたさ、が非常に深いものとして頂戴できるのではないかと思う。

松山典嗣師

有難うございました。人だけではなく、すべてのものを取り残さないというお話しですね。ありがとうございました。ジェンダーの話にまた、話を一度戻させていただきます。SDGs実現のひとつのキーワードは「対話」だと私は思っております。先ほどもお話をさせていただいた通り、SDGs推進委員会というのを庁内に設けて話し合いを行っております。そしてそのメンバーは、女性僧侶、男性僧侶、寺族、その他の

委員、様々な方で話をしています。

その話し合いを続けていくプロセスがすごく大事だと思っておりまして、私自身もその委員会に参加をさせていただく中で「ああ、こういう価値観があったんだ」とか「こういうものの見え方があったんだ」とか「こういうものの考え方があるんだ」と気づくことができ、本当に有難いなと思っております。お互いの見え方であったり、考え方という価値観の違いを受け入れることの大切さについて、お二方の意見を聞かせていただきたいと思います。



青山俊董老師

違うのが当たり前なのだけでも、みんな自分が間違いないと思って考える。道元禅師が『現成公案』の中で「参学眼力のおよぶばかりを、見取会取するなり」と。自分が参学、学んだことを、それから経験してきたこと、どんな人生を歩んだ、どんな教えを学んだ、そういうものが自分の中でのものを見る判断の基準になるわけで、結局、十人十色、同じ人がひとりもいるはずがないわけで、自分の目線しか見えない。経験したことしか聞けない。ですから、十人が十人、全部違って当たり前なのですよ。非常に狭い人生観や見方しかできないんだ、という自分

への自覚があれば、全部違うのが当たりまえ、立場が変わればまた違う、角度が変わればまた違う、違うのが当たりまえ。だからそこで大事なことは、この違った見方に対して謙虚に耳を傾ける、どのような意見に対しても、それぞれのその人の勉強の仕方とか経験とかいろんな面からですからね「あっ、そういう見方もあるか」と。

例えば、キリスト教の場合は砂漠の宗教ですし、仏教の場合はインドから中国の温暖な農業地域の南方を通して日本、というように自らいろんな面で違うに決まっているのです。違いには謙虚な気持ちで耳を傾ける。自分の考えは狭い自分の物差しでしかないから押し付けない。いくら自分はこう思うとしても相手に押し付けない。だから他の切り口を学び合っていこうじゃないかと、自分の切り口を相手には押し付けないんだと。そういう謙虚な姿勢でいけばいいだろうと思いますが、なかなか難しいですね。

ゴッドウィン建仁老師

全く同感です。人びとにとって意見交換の機会を増やすことが大切なのではないかと私は考えています。なぜなら、お互いに直接会って話をすると、私たちはもっと喜んで、相手の話を聞きたいと思い、もっと興味を持つようになります。あらゆるレベルの男性僧侶と女性僧侶が意見交換の機会を増やすことは、個人の抽象概念を現状に持ち込まないようにする助けになります。アメリカではあらゆるレベルに男女の僧侶が共存しています。従って、女性僧侶がある程度の権力を持っていることに皆が慣れており、性別の違う先輩や後輩がいることにも慣れていきます。アメリカの宗侶はこのような状況にいるため、様々な意見を喜んで聞きます。同じ場所にいなければ「私たちの意見はこうだ」「彼らの意見はこうだ」と非常に抽象的になってし

まいますし、同じ修行道場で一緒に過ごすことで、異なる意見に別の形で触れることができるのではないかと、謙虚に考えています。これはあくまでも私の意見ですが。

青山俊董老師

お釈迦さまがそれこそ、同じことを「群盲摸象」と表現しています。目の不自由なかたを集めて一匹の象さんをひき出した、みんな手で触ってみる。胴体に触った人は「壁みたいだ」という、鼻に触った人は「ホースみたいだ」しっぽに触った人は「払子みたいだ」とかまあいろいろ、みなそれぞれの。耳に触った人は「団扇みたいだ」とかね。それ自身は間違いないけど、一部だけしか見えてない、全体は見えていない。だから、一部分だけは間違いないかもしれないが、全体像としては見えていない。というその例えを「我々はその程度しか見られないんだよ」ということの一つの例えとして、お釈迦さまが仏教の古典で「群盲摸象」って説いたのがありますね。まあ昔からその辺はお釈迦さまがちゃんとお諭しくださったと思いますね。

松山典嗣師

有難うございます。青山老師にお聞きしたいのですけども、多様な価値観であったり、在り方があるというのは、ここ愛知専門尼僧堂でも同じではないか思います。ちょうど今の時期は上山したての僧侶がたくさんいて、それぞれにあり方があると思います。例えば、お寺の後継ぎ、あるいは在家から仏道を志す人もいれば、年齢層もたぶんバラバラだと思います。あるいは職歴も違うと思います。その多様な価値観が存在する中で、修行僧にここを大事にしてほしい、と伝えている青山老師の考えがありましたらお聞かせください。

青山俊董老師

一番大事なことは、芭蕉が「不易」と「流行」という言葉を使っています。「不易」というのは変わってはならん一点、「流行」はどんどん変わってもよい。その場その場での対応は無限の対応をして良い方と、その両面を。だから私は車に例えると車の心房と周辺、というような例えをしております。「不易と流行」この一点を外したら仏法でなくなるという一点は、何千年経とうと、アメリカ、ヨーロッパ、日本と移ろうと、変わってはならん一点がある。この一点を外したら仏法でなくなるという一点、これが「不易」ですわな。

その一点を抑えた上で、中国的展開、日本的展開、ヨーロッパ的展開、アメリカ的展開というように、無限の展開をしていく。あるいは相手によって無限の対応をする。それがいわゆる千手観音の姿でしょう。そういう不易と流行の両方の面を押さえていかなきゃいけない。例えば日本では日本のという展開があるわけで、アメリカに行けばアメリカの展開がある。しかし、どこまでも押さえておきたいものは、変わってならん一点はどこまでもしっかり押さえる。その上で不易の一点と車軸の一点をどう展開していくか、ということをまずは押さえなければならない。

ゴッドウィン建仁老師

有難うございます。一つめですが、仏教が新しい国に行くとき、確かにアメリカでは、鈴木老師、前住老師、片桐老師たちは、全部を伝えることはできないので、特定の部分を選んで伝えられました。それが「坐禅」『正法眼蔵』『伝光録』です。しかし、希望としてはそこからパイプラインを開いていてほしかったのだと思います。そして、そのパイプラインを経由して、いろいろなものがどんどん入ってくる、そのパイプ

ラインを開くということを望まれていたのです。

禅センターに来る人は資格取得、悟り、ストレスからの解放やストレス解消など、それぞれ違う目的で来ています。何のために来ているのかは、それぞれ違います。しかし、私は、彼らが来るのは、彼らの心がそこに連れてくるからだと感じています。何かが彼らをそこに連れてくるのです。私たちヒューストン禅センターでは彼らの滞在目的を常に尊重しており、彼らのハートが開き、仏性が何らかの形で現れることを許容するのであって、私たちがコントロールしようとするものではないと思っています。曹洞禅の強さは道元禅師が誰にでもオープンであったように、私たちが誰にでもオープンであること、そして、私たちがその場所にとどまることだと感じています。私たちがここにいるので、誰でも来ることができます。しかし、変化は常に起こるものです。そして、その変化を見守る強さが私たちには必要です。そうすれば、私たちの世界を大切にすることができるのです。

青山俊董老師

悲しみ苦しみとか、人生の行き詰まりとか、こういうことのおかげで、アンテナが立って道を求めようとする、というわけですから、まずは苦に導かれてアンテナが立つ、そして教えに出会う。悲しみ苦しみを何とかしようと思うことはむしろ尊いこととして、苦に導かれて、お釈迦さまも最初に「苦集滅道」と、四聖諦で最初に苦を説かれたように、苦の自覚、苦に導かれて、アンテナが立って教えに出会う。そして教えに導かれていくことによって本当の生き方に目覚めていく、そういうものです。最初は、悲しみ苦しみによっていうのは、むしろありがたい。悲しみ苦しみは、仏さまからの「アンテ

ナを立てよ」という、慈悲のプレゼント、こう頂戴したほうがいい。悲しみの中身はいろいろありましようけど、病気や失敗とかいろいろあるけれども、むしろそれが「アンテナを立てよ」という仏さまからの慈悲の贈り物と頂戴すべきだと思います。

松山典嗣師

先ほど、僧堂での多様な価値観という話をいただきました、今度は建仁所長に質問です。海外ではいろんな価値観と同時に、男女が一緒に修行するという、そのあり方の重要性や素晴らしさを教えていただきたい。

ゴッドウィン建仁老師

青山老師が仰ったように、みんな自分の意見を持っていて、自然界の中にいる人間には上下関係がある、なぜなら、私たちは「時間」を信じているからです。道元禅師は「私たちが時間である」と説いておられますが、しかし「時間」は存在します。ですから、私たちは年功序列を信じています。ある人はより上位に、ある人はより下位にと考えます。私たちは年功序列を自然に理解しているのです。

僧堂生活の良さのひとつは、私たちが自身で生み出す物語を見ることができることです。生活の中で「男性の方が優れている」「女性の方が優れている」「あの人が優れている」「あの人が優れている」という物語が生まれます。僧堂生活の最大の利点は自分の心がどのように働くかを研究し、私たちが常に物語を作り上げていることを学べることです。もし別々に修行していたら、私たちは自分が作った妄想の物語をすべて信じてしまいます。自分を信じることはとても大切なことですが、チャレンジすることを忘れがちです。どんなグループでも

一緒に修行すること自体がチャレンジであり、男だから、女だからという理由でチャレンジすることはありません。つまり、すべては私たちの心の働きと意見次第なのです。道元禅師、瑩山禅師の教えはいつも自分の妄想の物語を壊すのに役立ちます。それはとても大切なことです。

青山俊董老師

長短、両方あると思います。日本の場合は、というよりお釈迦さまは人間の弱さをご存じだったから、なかなか尼僧の出家を許されなかったことも、それであろうと思います。人間は弱いから一緒にいると妄想を起こしてしまいかねない、そういう意味で日本の場合は、一応は、尼僧の道場と男僧の道場は分けております。最近比較的男僧の世界でも、僧堂でも、尼僧を受け入れるようになってきましたが、実際に聞いてみますと、やはり尼僧は特別扱いになってしまふ、言うなれば役寮扱いみたいな特別扱いになる面があって、実際はご苦労しておられるようです。

私がよく雲水に言うのは、修行の願目は、道元様が「坐禅の床をやぶるほど修行しても、我で修行してはならん」いわゆる無我の修行。その無我の修行を私は「水になる修行」と雲水にしております。「私が」という氷を、仏法の光で水に溶かす修行。水だったらぶつかりません。どっちかが水だったらぶつからない。両方が氷だったらしょうがない。修行の一つの大きな願目は大部屋生活。一つの部屋に5人、ないし多いときは10人、いろんな人がいます。その、いろんな人と一緒に、ずっと24時間365日一緒に暮らしていくことは非常に大変なことです、だからこそ修行になる。だから大部屋修行というのは無我になる修行、水になる修行と思ってく

れと。そして、ぶつかりが生じた限りは、両方氷だったらしやうがないので、片方氷ならぶつかりませんから、ぶつかりが生じた限り「あっ、私も氷だったな」と。

もうひとつ、相手の氷のおかげで自分の氷に気づかして貰えた、相手の氷を拝みなされと、そういつて雲水には言っています。そういう意味で、同じ部屋で、大部屋生活を共に修行することの意味がある。一つの建物で男と女ならいいですが、一つの部屋の中で一緒というのはちょっと無理かと思いますが、そういう意味でね、一緒の修行道場というのには両面があるろうと思います。人間の弱さを知った場合、難しい面が多いのではないかな。



ゴッドウィン建仁老師

以前、タサハラ禅センターである実験をしました。私たちは「毘婆尸佛大和尚 尼棄佛大和尚 毘舍浮佛大和尚...」と五十七仏を唱えるので、新しく来た修行僧は祖師方はみんな男性だと思っていることに気づいたのです。そこで、ある住職が、インド、中国、日本から女性僧侶を調べ、また、お釈迦さまのお母さまなどをリストアップしました。「五十七仏」ほどではありませんが、何世紀にも渡る女性先人たちのリス

トで、それも唱え始めたのです。ある若い男性が私のところにやってきて、女性の名前を聞くのは初めてだと言いました。そして、彼は泣き出しました。長い修行の歴史の中で、女性たちがいかに重要な存在であったかをようやく理解したからです。これは私たちが試みた実験でした。

青山俊董老師

私はね、男のかたがおられる中で言いにくい言葉だけど、女性が本気になれば地球は安泰だと思っています（笑）やっぱりね、神様が女性に赤ちゃんを産むという使命を与えていただいているということは、子供はね、もう、母親がしっかりしていれば大丈夫なんです。3歳から5歳までの、基本の、一番の生涯を作る基本を作るのは、せめて3歳から5歳まで、その間に母がどんな姿勢かが、一生を左右する。だからね、女性がしっかりしていれば、明日の人類、地球は大丈夫だと私は思っている（笑）

ゴッドウィン建仁老師

『華嚴経』の中にこういう話があります。スダナが訪ねた僧侶の中に、ブツダの養母マハーパジャパティがいます。彼は彼女に「あなたの修行は何ですか、教えは何ですか」と尋ねました。すると彼女は「私は仏陀を育てました」と言いました。

一同（笑）

青山俊董老師

お釈迦さまも、一週間でお母さまを亡くしておられる。一週間ではお母さまのお顔も、写真はない時代だから、自分の、生涯見たこともないお母さまへの想いが、お釈迦さまの心の中には生涯にわたってあったと思う。『法句経』の

中に「世に母あるは幸いなり」という句が出てきます。そのお釈迦さまの心の中には、後に『地蔵菩薩本願経』を説かれたのも、忉利天に生まれ変わっているとされているお母さまへ説かれたものが『地蔵菩薩本願経』。お地蔵さまというのは母なる思いを説かれたものとされています、お釈迦さまの心の中には生涯お母さまへの想いがあったと思う。最期に涅槃像に摩耶夫人が描かれているのも、母のもと、お母さまへの想いがやはりあったことを象徴するのではないかと、思えてならない。

松山典嗣師

先ほど、青山老師から「女性が頑張れば地球は安泰だ」という言葉が出てきましたので、今日の一番大切なところの話をさせていただきます。本日「多様性」「対話」というテーマで話をさせていただいたのですが、今の宗門の在り方を考えたときにどうなんだろう？と思うこともございます。いろんなものを決めていくポスト、役職に立っているのはほとんど男性中心で、今日も周りにいるかたは男性ばかりでございます。そうすると会議の場合や重要な話し合いの場に女性不在のままいろんなものが決まってしまう。そうすると、男性中心で物事が決まってしまうと、男性目線で物事が決まってしまう、豊かな意見が出てこなかったり、女性の声が反映されないという課題があるのではないかと考えております。

青山老師が15歳に得度されてから今まで、宗門に関わっていく中で、いろんな歴史を見てこられたと思いますが、この男性中心でいろんな物事が決まってしまうところの弊害といいますか、マイナス面みたいなものを正直にお話しいただけたらと思っております。

青山俊董老師

それこそ曹洞宗の場合は先ほど申したように、道元様が「男女を論ずること莫れ」で「日本にひとつの笑いごとあり。結界の道場と称して、女人を入れざる。女人なんの咎がある」と、まあ、そこまでおっしゃっている道元さまの流れにありながら、日本の長い歴史の中では、徳川幕府が儒教的な面がずっと、明治から最近まで。ですから、その流れをいただきつつも私が15才で頭を剃ってここに入る頃までは尼僧は自分で育てた弟子も自分の弟子にすることができなかった。得度の資格も持たない、嗣法も出来ない、尼僧には何の権利もなかったのですよ。私がここに入って2年目くらい、だから16か17才ですよ。その時に初めて尼僧に、自分の弟子を得度することが許された。それでこの先生方は泣いて喜ばれて「なんか感想を書け」と言われた。私はね、16才の頃なのだけど生意気に『礼拝得髓』を持ってきて、こんなの当たり前じゃないかと（笑）、700年も800年も前に道元様が「男女を論ずること莫れ」「いづれも得法を敬重すべし」と言ったんで「そんなのは当たり前だ」とこう書いて出した。そしたら先生方は、えらいこと言う奴が出たと思って、どうもその作文は宗務庁まで行ったらしいんですけどもね。しかしながら、16才の時にやっと得度が許されて、一つずつ、嗣法は許しても全部は許さんとか、とんでもないようなことですが、一つずつ、全国の尼僧の申請を受けては一つずつ許されてきている。一番最後が師家養成所。尼僧も師家になれる。その師家養成所が、本来は本山に置くべきだけど、尼僧を本山の師家養成所に入れるわけにはいかないっていうので、師家の養成所をここの尼僧堂に置いた、それが特別尼僧堂です。それが昭和45年だと思いました。昭和45年の時に尼僧の師家の養成所がここにできまして、一

応のところ、まあ制度上は、まったく平等に、
このように昭和45年来でなったわけです。

しかしながら、私は正直申して、大学も大学院も研修所もほとんど尼僧一人、みんなの中で尼僧一人っていう形できました。大学がね、共学になったばかりでしたから、全校で女性は英文科に一人、文学部に一人っていう風な、人数が少なかったものですからね、非常に女性も少なかった。全校で4人くらいしかいなかったですね。研修所とか大学院とか行くとほとんど一人でした。それが卒業して今度ここへきて、例えば堂長会議とか師家会とかに出ますけど、ほとんどいつも一人でした。というようなことで、どういうものかいつも男性の中で一人という暮らしを今日までしてきて、あんまり私は、そういうことは意識せずにきましたけれども。考えたら、確かにそれは女性の意見が反映されていないというかもしれません。

それでもね、私のそういう存在が他宗から見ると大変眩しく見えるらしくて。何人かが、例えば高野山の真言宗ですか、高野山での尼僧の学校の、いわゆる世話人の先生が訪ねてきて「私どもはなんの資格もない」と。私の存在が非常に眩しく見えて、相談に来られたこともある。

ゴッドウィン建仁老師

青山老師、あなたが西洋の女性僧侶たちに与えた影響はとても大きいものです。あなたがアメリカを訪問した際、西洋の女性僧侶たちに生命を吹き込んだのです。

ワナー慈照、ベイズ澄禅...その他にもたくさんの女性僧侶がいます。今回、彼女たちは私に「青山老師が私たちにとってどれほど重要な存在であったかを伝えてほしい」と託されました。あなたの大本山總持寺西堂就任の報告を受け、

自分たちも先に進み、それなりの地位につくことが可能だと理解できたからです。おそらくアメリカの寺院の半分は女性が住職を務めています。また、あなたの著書『Zen Seeds』は、アメリカではとても重要な意味をもっています。人びとはそれを読んで、あなたの教えの真髓を理解しようとしています、その結果が西洋の現状です。あなたの教え、そしてあなたのすべてに対するとても深い許容、あなたの教えのすべてにアリガトウゴザイマス。

青山俊董老師

今、日本の場合は尼僧がどんどん減っております。これは先ほど、「不易」と「流行」ということで。流行の面、日本の流行の面は先祖供養。これは例えば、日本の歴史を見たときに、徳川幕府がキリシタン排斥のための宗門改めということをして、全部の人をどっかのお寺へ所属させて、お寺のお坊さんを戸籍係にして、毎年名簿を提出する、これがひとつ、檀家制度。それから今度明治で、国教を神道にするために、お坊さんを還俗させた、いわゆる廃仏毀釈です。ということで、日本の仏教はむしろ政治に迎合したと言っていいどうかはわかりませんが、両方とも日本の政治によって動かされて、日本のいわゆる、先ほど言う不易と流行でいう流行の面が日本の独特の仏教の姿としての檀家制度。

それから、本来ならば出家というのは全部を捨てて命がけで出家しなきゃならん、そして法の相続でいかなきゃならんものが、家庭を持つことによって親子相続になりかねない。親子相続の中にはどうしても甘えがある。それは、寺に生まれて発心が入れば鬼に金棒だけでも、それは非常に難しくて、とかく「お寺に生まれたからしょうがないから後やろうか」というよう

な親子相続の甘えが相当に増えてきた。

こんなようなことがあって、幸い尼僧の場合は、そういう檀家制度からもどっちからも外れているから私は幸いと思っていましたけども、現状の日本の場合、尼僧の後継ぎはものすごい勢いで減っております。むしろ本来の仏教の姿に戻れば、たった一つの命を懸けるのだから最高のものに懸けようとする人が出ても良いはずなのだが、現状はそういう日本の姿のために、尼僧が大変な勢いで減っているのが事実だと思う。

ゴッドウィン建仁老師

私が信じていることは、人びとは真の修行者に会うとそれを感じ、心の修練を積んだ人に会うとそれを感じるということです。何が起こっていて今後どうなるのかはわかりませんが、真の修行者がいる限り、道は生き続けるでしょう。私たちがすべきことは、真の修行者が現れたら、それを励まし続けることです。だから私は、經典にあるように、私たちの足元から道が生まれ、私たちが一緒に道を歩むことで、その歩みが生きてくることを信じています。

青山俊董老師

尊いことです。

先ほど、日本の仏教は「流行」の面での先祖供養が表に出すぎている、と言いましたけれど。先祖供養が悪いわけではないけれども、こういったのがありますね。「一日に八万四千の煩惱あり。八万四千の御仏います」って詠われていますね。「一日に八万四千の煩惱あり。八万四千の御仏います」。煩惱の数だけ教えが説かれ、煩惱の数だけ仏がおでましくださる。それが千手観音だったりするだろうと、ですから、千手の中の3本や5本に先祖供養を持っていいます

ども、現在の日本の場合は千手の中の7、800本までが、どうも、先祖供養じゃないかと。これがね、跡継ぎができなくなっている本当の意味での「不易」の一点を割いて、たった一つの命をこれに賭けるという方の命がけのものではない姿が出てきてしまっている。非常に残念だと思うのです。そういう点ではむしろアメリカとかヨーロッパの方が、お釈迦さまに近い本来の、先祖供養ではない本来の姿に近いと思う。ですから逆に今度は、日本に逆輸入して、本来の仏法のたった一つの命を懸ける最高の教えとして、こうなればお坊さんは増えてもいいはずなんです。だれしも命は大事だから。そのように、逆に今度は向こうのあり方に真似をして、逆輸入して日本の仏教の姿勢を改めなきゃならんのではないかなんて思えてならんのです。

ゴッドウィン建仁老師

西洋でも、私たちは道元禅師が大好きで、道元禅師をよく勉強しています。私たちは先祖を崇拝しているわけではありません。しかし、道元禅師と瑩山禅師を崇拝する傾向があります。私たちの勉強欲は強く、曹洞禅の教えに触れ、知りたいという欲求があります。なので、祖師方の御教えを学び、実践していきたいと考えております。

青山俊董老師

道元様やら瑩山様ということは言い換えればさっき言った「不易」の一点ですから、ここを押さえていくことはどこまでも大事なことです。先祖供養は流行のほうですからね。

松山典嗣師

本日はありがとうございました。

本日は、「ジェンダー平等」をテーマに話をさ

せていただいて、宗門の課題の一つでもある、なかなか女性が重要な役職に就きづらいという現実がある中で、青山老師が大本山總持寺の西堂に就任をされ、そして建仁老師が国際センターの所長に就任されたということは、今後大きな意味を持っていくところではないかと思っています。

男性女性共に、活躍できる方が然るべき立場になっていろんな声を挙げていただく環境作りをしていくためには今後どういったことをすればいいのかということと、今後僧侶に期待すること、この二点をお聞かせいただきたいと思います。



青山俊董老師

私が目指しているのは、本山とか宗門という小さなものではなくて、ちょっと大げさですが「明日の人類を救う宗教は仏教なのだ」ということです。これはアインシュタインが言っています、ドイツのアインシュタインが「科学の先の先の方を救う宗教があるとしたら仏教なのだ」と言っています。それから、残念ながら亡くなってしまいましたが、筑波大の村上和雄先生も同じようなことをおっしゃっており「2500年前に釈尊は直感で天地宇宙の真理を見つけ出した」とまあそういう多くの科学者が言っていますけ

ど、私自身も、宗門のとか本山のというそういう小さな話でなくて、人類そのものの明日をどうするか、これは仏教しかないと思っています。だから明日を背負うお坊さんたちに「どうぞ頼むぞ」。私も90才になりましたから、遺言のつもりで。そして、仏教はそれほど素晴らしい教えなんだから、本気でそれに取り組んでもらいたい。明日の人類を救う、地球を救う仏教を背負う人として、本気に取り組んでほしい。そういうことを頼みに西堂というようなお役を頂戴したけど、人事のかたと相談の上ですけど、若い雲水にせいぜい話をして欲しいとおっしゃってくださいるので、それこそ遺言に行くつもりです。明日の宗門を、小さく言えば本山かもしれませんが大きく私は宗門、もっといって仏教界、もっといって人類を背負う教えを背負っているんだから、私どもは。その覚悟のもとに、自覚のもとに、学び、精進し、頼みますぞと、それを言いに行きたいと思っています。

ゴッドウィン建仁老師

私は、その素晴らしいお言葉に「本当にありがとうございます」とだけ付け加えたいと思います。私は今回日本に来てから、日本原産とテキサス原産の植物をいくつか見かけました。赤いつばみや藤の花、日本原産の桜、そしてヒューストン原産の桜。それらはとても自然な形でそこにありました。そして、私たちの修行は、日本原産であり、世界中のどこにでもあるものです。ですから、私が曹洞宗に望むことはこの国から種をもたらし、肥料を与えるような、さまざまな植物に対する寛容さと好奇心を持っていただくことです。私たちは皆、曹洞禅の同じ法雨を必要としています。

松山典嗣師

今日は、長時間にわたりお二方に話をいただいて、ありがたい教えを頂戴いたしました。本当に有難うございました。



坐禅への脚注集 (23) くつろぎのなかで 思いに出会う (3)

藤田一照

(承前) さて、このやり方でも功を奏さない場合は、釈尊は今度は「それらの思いに心を遣わず、注意を払わないようにする」ことを勧めている。われわれが坐禅を指導する場面では、思いに対しては、最初から「注意を向けないように」という言い方をする場合が多いのではないかと思うが、釈尊の場合は、まず思考そのものをよく見つめて、その不善さをよく知って、その後に初めて注意を向けないようにするという具合に手順を踏んでいる。そうして初めて、不善な思いにはもうこれ以上関わらないという決意が確立して、その思いが納得して消えていくということが起こる。そこではもう思いの吸引力が弱まっているから、それが容易にできるのである。

曹洞宗の伝統では、坐禅中に湧いてくる思いに対しては「追うな、払うな」という表現で、考え事に耽ふけるという一つの行き詰まり、そして考え事と争うというもう一つの行き詰まりに陥らない「中道」のあり方を説いている。そのこと自体に間違いはないとわたしは思っているが、この言い方だけでは、実践上不十分なのではないかと考えてきた。不十分というか不親切というべきか、まだまだ言われるべきことがあるのではないか、ということだ。もちろん、「そこから先は坐禅修行者自身に自分で探求させるべきだ。あえて言上げすべきではない。まわりで親切めかして、とやかくと余計なことを



言うのは間違いの元だ」というのも十分に根拠のある意見だと思う。しかし、今回紹介した経典に見るように、釈尊が懇切丁寧に「追うな、払うな」の詳細を説いている文献がある以上、それから学ばない手はないのではないだろうか？

「追うな、払うな」にせよ、また内山興正老師の造語である「思いの手放し」にせよ、難しい専門用語ではないから、われわれは一見わかったように思ってそのまま素通りしてしまっているのではないか。浅い理解（あるいは、間違った理解）のままで自分にはそれが実践できていると思いついてはいないだろうか？

「思量箇不思量底」とか「非思量」といういかにも難解な術語をブラックボックス化させないために、われわれの先人たちが、「追うな、払うな」とか「思いの手放し」という平言葉の平易な表現を編み出してくれたのだ。それを継承したわれわれがもしかしたら「追うな、払うな」や「思いの手放し」をブラックボックス化させているのではないか。単なるスローガンにしまってはいないか。道元禅師の「道得」という貴重な教えを受け継いでいるわれわれとしては「言わく言い難し」のところで腰を下ろすのではなく、そこから立ち上がってあえて言上げていく一步を踏み出すべきだと思う。「追うな、払うな」や「思いの手放し」の実際に向かって、きめ細やかに正確に、言葉にできるぎりぎりの限界点まで肉迫していくのである。

さて話を経典にもどそう。「それらの思いに心を遣わず、注意を払わないように」しても、まだ不善な思いが去らないようなら、釈尊は「それらの思いを形作る思考の形成作用を緩めるように意を注ぐ」とようにと勧めている。この表現が正確に何を意味するのか、実は今の時点では確証がないのであるが、おそらくは、浮かんで

きた思いそのものを問題にするのではなく、その思いを産生している母体のようなものに目を向けるということではないだろうか？

思いが大地に生えた草のようなものだとすると、それをはぐくんでいる大地のようなもの、あるいは思いの「根っこ」にあたる潜在意識下の情報処理プロセスを指しているのではないか。仏教で「心地」と言われていることだろうか？ 思いを発生せしめている地盤そのもの、頭の中でぺちゃくちゃと独り言を言わせている、思いの背後にあるものへと目を向けていくと、その副次作用で思いがだんだんスローダウンしついには止まってしまうようなことが起きるのである。読者のみなさんも実地に試して確認していただきたい。

さて、これまでのところ、坐禅についての考察を進めるうえでの材料として、瞑想行中に湧き上がってくる不善な思いに対してどう対処したらよいのかという問題をめぐって釈尊が具体的にやり方を説いているパーリ仏典の *Vitakkasanthana Sutta*（『考想息止経』中部経典第二十経）を取り上げきた。そこでは五つの対処法が説かれているが、以上でそのうちの四つについて若干の考察を加えた。最初の対処法でうまくいかないときは、第二の対処法を、それでもダメなときは第三の対処法を、……というふうに、不善な思いを手放す困難さの度合いに応じた段階的な説き方がなされている。

だから最後の五番目に挙げられているのは、その前の四つの対処法がいずれも功を奏さなかった場合にどうするかという最終最後の対処法ということになる。ある意味、最悪の場合である。それは「歯をくいしばって、舌を上口蓋に押し付け、気づきで以って、その心を打ち負かし、さえぎり、粉碎する」というやり方だ。実

は『考想息止経』という経典があることを知って初めてそれを読んだとき、この箇所にかかかってまず感じたのは、これ以前の四つの対処法に比べてひどく暴力的というか無理矢理というか、わたしが抱いている平和で慈愛に満ちた釈尊のイメージに到底ふさわしくないことを言っているなという違和感だった。

このやり方のたとえとして挙げられているのも「ちょうど、力の強い者が弱い者の、頭や喉や肩をつかみ、打ち負かし、さえぎり、粉碎するようなものである。（それと）同じようなやり方で……」といかにも戦闘的なイメージが喚起

されるような表現になっている。釈尊が勧めるいろいろな方法を試してみたけれども、結局どれもこれもうまくいかなかったら、もう最後の最後は力づくでなにがなんでも思いを押さえつけるしかない、ということなのだろうか？「さすがの釈尊も最後の手段としてはやっぱりこういうことを言うしかないのだろうか？」とちょっとがっかりしたのである。これだと「坐禅は安楽の法門なり」と言う道元禅師の教えとの整合性が崩れてしまうのではないかと、正直なところ困惑の思いも湧いてきた。

（続く）

国際ニュース

ヨーロッパ国際布教総監部主催協議会

期日：2022年6月21日

会場：Zoom



曹洞禅ジャーナル 法眼(年2回発行)

発行所 曹洞宗国際センター

Soto Zen Buddhism International Center

633 Fallon Avenue, San Mateo, CA 94401 Phone: 650-344-4021 Fax: 650-344-4022